

経済マンスリー [オーストラリア]

景気減速に歯止めがかかるも、中銀は先行きを懸念

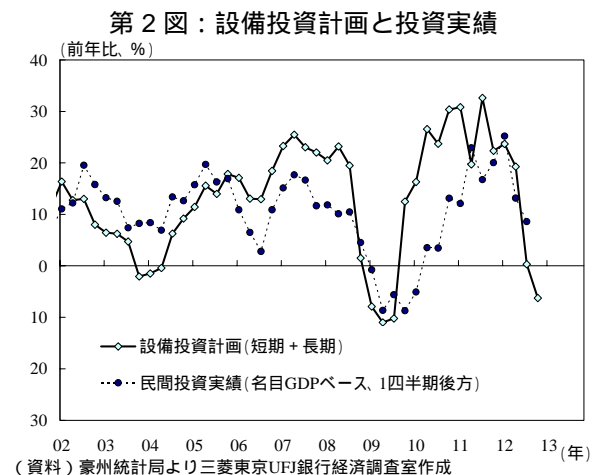
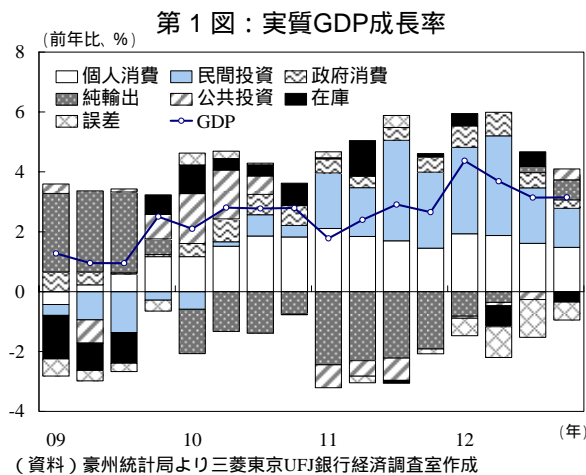
豪州経済は、3%近傍とみられる潜在成長率並みの成長ペースを維持している。10-12 月期の実質 GDP 成長率は前年比 3.1%と前期 (同 3.1%) から横ばいで推移し、年初来の減速基調に歯止めがかかった (第 1 図)。中身をみると、設備投資や個人消費の鈍化を公共投資や輸出の持ち直しでカバーした。

もっとも、足元の指標に景気再加速に向けた力強さは感じられない。金利低下を好感した消費マインドの改善や、中国向けを中心とする輸出の持ち直しなど明るい指標もみられるが、企業部門の低迷が景気回復の重石となっている。

10-12 月期の営業純益は、鉱業・製造業の低迷で前年比 7.6%と 3 四半期連続でマイナスをつけた。企業マインドは冷え込んでおり、2 月の企業景況感指数は 2.7 ポイントと、前月から一段と低下した。同月の雇用統計で、雇用者数は前年比+1.7%と 1 年 7 カ月ぶりの大幅増加を記録したが、統計サンプルの入れ替えが作用した可能性がある。その他の雇用関連指標は軒並み軟調であり、慎重にみておく必要がある。

今後、これまで景気の牽引役だった資源部門は軟調が予想される。中銀は 2013 年中に資源部門の大型設備投資がピークアウトするとみていたが、実際、10-12 月期時点の企業の設備投資計画 (中長期) は前年比 6.3%と約 3 年ぶりの減少に転じ、設備投資が先行きの景気の下押し材料になることを示唆した (第 2 図)。中銀の期待は個人消費や住宅といった非資源部門に、累積的な利下げ効果が波及することであるが、雇用が軟調ななか、非資源部門に資源部門の低迷を補うほどの力強さは見込みがたい。

3 月 5 日、中銀は 2 カ月連続で政策金利を過去最低の 3.00%に据え置いたが、声明文は「一段の緩和余地がある」と追加利下げに含みを残した。背景には中銀が依然景気下振れを警戒していることがある。2013 年の景気展開が想定以上に軟調な場合、中銀は追加利下げに踏み込む可能性は残されていると考える。



照会先：三菱東京 UFJ 銀行 経済調査室 竹島 慎吾 shingo_takeshima@mufg.jp
福永 雪子 yukiko_3_fukunaga@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。